

第3回 「徳山あすかのロシア生活」

時勢を反映、モスクワの隠れ観光スポット

3月には比較的たくさんのお客様が日本からモスクワに来られ、町を案内する機会がありました。今モスクワに来る人は、ロシア自体が初めてという人はほとんどおらず、仕事メインで、その合間に少し町を見るというパターンが多いです。また、日程や派遣元の都合で、滞在できるのはモスクワのみだけれど、キラキラした首都だけでなく、ロシア全体で起きていることを把握したいというニーズもあります。そんな目的で訪れるのにふさわしい場所をご紹介します。

勝利博物館



勝利博物館の象徴「栄光の間」

勝利博物館といえば、従来のガイドブックなどでは、大祖国戦争（第二次世界大戦）におけるソ連軍の勝利と栄光を讃える場所として紹介されていますが、現在進行中の特殊軍事作戦に関連した展示品も多数あり、展示内容が日々グレードアップしています。

私が訪れたのは3月8日、国際女性の日でした。女性の日にはロシアでは大切な休日としてお祝いされており、春の訪れを象徴する日でもあります。今年は人手不足を反映してなのか、全体的に、市内にあるヨールカ（クリスマスツリー）の片付けが遅れていました。ロシア正教のクリスマスが終わっても、冬の間は出しっぱなしにしていることが多いヨールカですが、さすがに女性の日までには片付けていないとまずいだろうというのが市民の共通認識でした。勝利博物館の最寄り駅である、地下鉄勝利公園駅の前には立派なヨールカがあります。8日に駅に降り立つと、さっき片付けたばかりと思われるヨールカの飾りが無造作に置いてありました。

この日は女性の入場が無料で、吹奏楽団による祝賀コンサートもありました。トロンボーンの素晴らしい演奏を聞きつつ向かったのは、すでに常設展示となったコーナー「いつものナチズム」です。この展示コーナーの名前は何を意味しているかという、2014年以降から現在に至るまでウクライナ全土やドンバス地方で起きた様々な武力衝突と、第二次世界大戦中にウクライナで起きた事件を比較展示し、要するに、ウクライナは歴史的に、ナチズムと繋がりがありましたよということを言いたい、というわけです。展示はホールの左側から進み、そこは現代のコーナーです。次に見るべき右側が1940年代の展示なので、最初にこの展示全体の意図を理解していないと、なぜいきなり歴史の展示が始まるのか、戸惑ってしまいます。

私の目当ては、北朝鮮関連の展示でした。クルスク州の奪還に駆り出された北朝鮮兵士の手紙や、彼らが身につけていたものがガラスケースの中に展示されています。いくつかの手紙にはロシア語訳がついており、その多くは、国に奉仕す



る用意ができていて、最高指導者の期待を裏切らないようにする、といった内容でした。見かけたのは「最高指導者」とか「愛する将軍様」という表現で、金正恩という名前そのものは出てきていませんでした。カラーの竹の絵が添えられた詩もありました。残念ながら、「北朝鮮の兵士が前線で書いた詩」という説明しかなかったため、内容がどんなものかはわかりませんでした。

メモ帳には貫通した銃弾によると思われる弾痕が残っており、痛々しさが伝わってきます。また、手紙にはあちこち

に血の跡が残っており、判読できない箇所も。あえて数字は見えないように加工されていましたが、ロシア軍の認識票もありました。認識票はドックタグとも呼ばれ、戦死した際の身元確認を目的に身につける、金属製のペンダントのようなものです。展示されていたのはわずか5枚でしたが、これを見せられると、やはり北朝鮮兵の犠牲が本当に出ているのだということを実感させられます。

ロシアの各地には特殊軍事作戦をテーマにした博物館がありますが、基本的には戦利品やロシア軍の装備を展示しており、ロシア軍の勇敢さを讃えることがコンセプトになっています。このような軍人の痛みや被害をリアルに思い起こさせるような展示は見たことがありませんでした。この日に訪れていた他のお客さんも、それぞれの展示を熱心に見ていました。



英雄主義博物館

ВДНХ (ヴェーデンハー) の名称で知られる全ロシア博覧センター。巨大な敷地に様々なパビリオンや博物館が点在しています。その中で知る人ぞ知るのが、英雄主義博物館です。先ほど、ロシア各地に特殊軍事作戦をテーマにした博物館があるとしましたが、モスクワでは、この博物館がそれにあたります。ふらっとこの博物館を見つけるのはかなり難しいです。ヴェーデンハーの地下鉄駅から歩いて、早足で20分はかかりますし、皆が足を止める大噴水よりもさらに奥にあります。近くにあるウズベキスタンパビリオンのような外観の派手さもなく、入り口には控えめな看板があるだけです。展示スペースも広くなく、30分もあれば全ての展示品を見ることができます。



英雄主義博物館の入り口

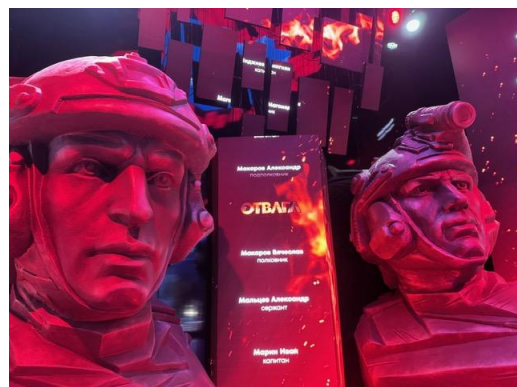
入場は無料で、手荷物検査をして中に入ると、階段や通路がスケルトンになっています。足元をのぞくと、ウクライナ

車のナンバープレートや、ミサイルの破片、ドローンの破片、軍服など、戦地から持ち帰ってきた色々なものが隙間なく敷き詰められています。イギリスから供与された長距離巡航ミサイル「ストームシャドウ」や、アメリカの高機動ロケット砲システム「ハイマース」もあります。破片と言っても相当大きいです。ドローンには偵察用、自爆用など、用途も形も実に様々な種類があり、ほぼ無傷で残っているものもあります。アフデーエフカで鹵獲されたイギリス製装甲車「マステイフ」のハッチもありました。珍しいところでは、ウクライナ側で戦っていたイギリス人傭兵が着ていたという、イギリス国旗がついたジャケットもありました。



英雄主義博物館内部

廊下には、ロシア軍がこれまで手中におさめた町の名前と、簡単な紹介が書かれています。どの町も、日本のニュースで一時は話題になったところばかりですが、この4年間の間に、あまりにもたくさんのニュースがありすぎ、もう一般の人は覚えていないでしょう。でも、これらの町の人々は、日本でニュースになってもならなくても、現在進行形で、戦時下の極限を生きているのだと思わされます。



モニターには戦死者の氏名が

映し出されています。その雰囲気的に、ベラルーシのブレスト要塞を思い出しました。ただ、ブレスト要塞の方は厳しくも憂いを帯びた顔をしているのに対して、この博物館の兵士の顔は、視線も強く、戦いの最中であるという印象を受けます。

博物館の奥には、犠牲者を讃えるゾーンがあり、2人の兵士の顔が鎮座し、顔と顔の間にあるディスプレイに、名前や階級が次々と

映し出されてい

オブラスツォフ記念中央人形劇場

もう一か所だけ、モスクワに来たら訪れてみて欲しい場所をご紹介します。オブラスツォフ記念国立アカデミー中央人形劇場は、1931年に創立された歴史ある劇場で、自前で工房や博物館を有し、ロシアの数ある人形劇場の中で最も中心的な役割を果たしています。



オブラスツォフ人形劇場のからくり時計

日本では、この劇場は子ども向けとして紹介されることが多いため、ここまで戦争関連の話をして、なぜいきなりこんな劇場を紹介するのか?と思われるかもしれません。しかし、人形劇場イコール子ども向けというのは大きな先入観で、この劇場の出し物は、普遍的なテーマについて、大人が考えさせられる作品が多いのです。感情の整理がつかなくなったり、世の中や社会への疑問、やるせなさが蓄積した時、芸術が助けになることもあります。私の一押しの演目が、昨年秋からレパートリーに入った新作の「ファウスト」です。ゲーテの戯曲を元にした作品ではありますが、一般的なオペラとはストーリー展開が違ってきます。老博士ファウストではなく、悪魔メフェストフェレスが主人公です。彼は自分で「伝染病」を作り、人々を破滅に導きますが、そこに少年の姿をした神が戦いを挑みます。

内容の面白さに加え、人形の出来栄、人形と人間の共演、連携が素晴らしく、音楽やダンスを多用しており、他の演目と違って一切セリフがありません。しかしセリフがなくても、完全に理解できます。まさにロシアの芸術の良いところ取りです。圧倒的な力に対抗できない無力感に襲われても、最後に一抹の光と希望を見出せる、まさに今のロシアだからこそ生み出されたであろう作品です。



「ファウスト」カーテンコール

投稿《旅行記》

北京で見た日本映画人大陸での足跡

菅原信夫 (SRC 湘南ロシア倶楽部・専務理事)

昨年、長春・満映撮影所跡博物館訪問を中心とした中国での日本映画人の活動を報告しましたが、本年2月春節見学がてら北京を訪問し、中国電影博物館で情報を得ましたので、日中映画史続編として旅行記を寄稿いたします。



今年の中国旧正月(春節)は、中国政府による日本観光ポイコット指令から始まった。日本政府速報値によると、今年1月の中国からの入国者は385,000人で昨年同月の60%減とされている。この状態が春節終了(2月17日～3月3日)まで続く予想される。

この時期に北京訪問を企画したのは、私の中国語教師が一時帰国をするので同行できるという理由以外に、空港、ホテルをはじめとした観光施設が空いているという期待があったからだ。

事実、北京首都空港はまさにガラガラ、この様子には息を飲んだ。空港から一路市内のホテルへ。今回利用したのは北京新世紀飯店。日本人訪中者がピークを迎えた2010年頃にはJALホテルズの一つとして日航飯店なる名前で営業していたホテルだ。今回到着した17日は、客はまばらだったが、翌18日からは地方からの団体客が大挙到着し大変な混雑状態になった。

右の写真はホテル28階の部屋から北京動物園方面を写したものの。幹線道路を走る車の数が少ない。大気汚染(PM2.5)が大問題になった北京だが、この日から帰国まで快晴の天気とPM2.5の減った大気のおかげで、滞在は快適であった。

